

統合失調症患者、1週間に働ける目安 住吉福大教授ら手法開発

記者発表する住吉教授
(右)と橋本准教授



響を与えるとした。
この研究を基に、患者
が一定時間働ける確率
を導き出す推定式を作
成した。

研究成果は二十八
日、米国の科学雑誌に
発表された。研究成果
を国内外に発信し、臨
床現場での普及を目指
す。住吉教授らは「研
究成果を患者の社会復
帰の促進につなげた
い」としている。

福島大人間発達文化
学類の住吉チカ教授は
大阪大大学院連合小児
発達学研究所の橋本亮
太准教授らと連携し、
統合失調症患者が一週
間に働ける時間の目安
を示す手法を開発し
た。「週当たり二十時
間以上働ける確率は70
%」などと推定するこ
とで、患者の労働時間
の目標設定ができるよ
うになり、患者、家族、
医師らが治療方針を考
える際の指針となる。

住吉教授らは患者百

統合失調症患者の 働ける時間を推定

福大・住吉教授らチーム



福島大人
間発達文化
学類の住吉
チカ教授

(51) 写真と大阪大大学院連合小児発達学研究所の橋本亮太准教授(47)の研究チームが、統合失調症患者について、発症前と比べた認知機能低下の度合いから、患者が働くことができ

る時間を推定する方法を解明した。28日、米科学雑誌「スキゾフレニア」リサーチに研究成果を発表した。この方法を用いれば患者ごとに労働時間の目標設定がしやすくなり、社会復帰の促進につながるという。研究チームは、患者の発症前の認知機能を推定し、発症によってどれだけ認知

機能が低下したかを調べる手法を用いて、低下の度合いと働くことができる時間との関連を調べた。結果、週20時間以上仕事をすることができるかと推定されたのは、認知機能が保たれている患者で96%、低下している患者では53%だった。橋本准教授は、これまで患者がどれくらい働けるかについては、医師が経験や勘に基づいて判断していたとし、「今回の研究では客観的なデータに基づいて説明できることから、患者や家族の理解が深まる」と意義を話している。